

# 「アブラハム・リンカンにおける アメリカ合衆国のビジョン」

鈴木 有 郷

## 序

アメリカ合衆国第16代大統領であるアブラハム・リンカンは、「奴隷解放の父」として、アメリカが生んだ偉大な政治家として、卓越した文学的才能を潜めた弁論家として、広い世界観と深い道徳性を兼ね備えた思想家として、アメリカは勿論日本においても多くの人々によって親しまれ、論ぜられ、研究されてきた。特に最近のアメリカ思想界は、リンカンをアメリカ特有の「市民宗教」(civil religion)の確立者として再評価する傾向にある<sup>1)</sup>。

このような、リンカンをアメリカ民主主義の最も生産的、創造的産物とみる見方に根本的な軌道修正を迫った人物が黒人の歴史学者ビンセント・ハーディングである。ハーディングはその著書 *There Is a River*<sup>2)</sup>においてリンカンを白人優越主義者の典型と定義し、彼が「奴隷解放の父」として一般に尊敬されるようになったことはアメリカ黒人の人権回復の歩みの中で起こった最も皮肉かつ不幸な出来事であると結論する。リンカンにとって奴隷解放は、あくまでも南北戦争というアメリカ合衆国未曾有の戦いを勝利に導くための戦術に過ぎなかった。彼は徹頭徹尾連邦維持をその政治活動の目的に置いた大統領であり、その視点から目前の政治状況を測るに類い稀な政治家ではあったが、決して人間の解放という崇高な目的に命を賭けた指導者ではなかったと言うのである。ハーディングによれば、奴隷制徹廃の主人公はリンカンではなく、南と北の黒人民衆であった。彼ら

の解放への情熱こそが、そしてそれのみが、南部の奴隷制を崩壊に導き、ひいては南部の奴隷制となんら質的に変るところのない北の白人優越主義と徹底的に対決する革命的パワーを生み出したと言うのである。

しかし、黒人蔑視が渦巻くアメリカにおいて、黒人民衆の解放への情熱と力は決して正当に評価されることはなかったとハーディングは主張する。何故か。奴隷制反対の立場に立っていた良識派の白人さえも、黒人を白人の庇護の下においてのみ自由を駆使できる非主体的、受け身的存在としかみなさなかつたからである。この根強い人種差別的風潮こそ、リンカンをして黒人民衆をいともたやすくその解放の歴史の主人公の座から引きずりおろし、自らを「奴隷解放の父」に祭り上げることを可能にした土壌であったとハーディングは言う。リンカンという一人の典型的白人優越主義者が、すべての人間をその人格によって測る人道主義者として崇められ、神格化されてきたという事実はこの黒人の歴史学者は歴史の大きな皮肉を見るのである。

以上概観したハーディングの主張が最も挑戦的であるのは、これまで自明のこととされて来たリンカンにおける「すべての人に開かれた自由と平等の国アメリカ」というビジョンが、実は彼にとって単なるレトリックに過ぎず、「白人のための国アメリカ」こそ彼の政治行動や思想の基盤であったとする点にある。一体アブラハム・リンカンはアメリカ合衆国の歴史的意義をどのように理解していたのであろうか。我々はハーディングの問題提起を真剣に受け止めつつ、この問をもう一度深く問い直してみたい。

## I. 1854年以前のリンカン

少年時代のリンカンの愛読書の一つがアメリカ合衆国初代大統領ジョージ・ワシントンの伝記であったことから分かるように、彼は幼い頃から「建国の父祖たち」の思想に深い関心を寄せていた。1832年、23才の時彼は初めてイリノイ州議会へ出馬しているが、当時既に彼の中ではジョージ・ワシントンの他にトーマス・ジェファソンやジェームス・マディソンといった独立宣言や合衆国憲法の起草者たちの思想がアメリカ民主主義の

根源として不動の位置を占めていた。すべての人間は創造主たる神によって、生命、自由、幸福の追求という誰にも譲ることのできない一定の権利が与えられているのであり、政府はそれらの権利を守るために存在する。故に政府の権力はそれに被治者が同意を与える場合にのみ正当とされる。この政治的確信は、ジェファソンを初めとする「建国の父祖たち」にとってそうであったように、リンカンにとっても又自明の真理であった。旧いヨーロッパ的君主制の残滓を完全に払拭したアメリカであるからこそ、国民は身分、家柄、血縁関係に関係なく、正直、勤勉をモットーに自らの可能性を拡大して行くことができる。このジェファソンの理想主義は、リンカンの中で文字通り血肉化されていたのである。

リンカンがアメリカに対して抱いていた雄大なビジョンは、彼が1837年2月に公にした奴隷制に関する見解の中に暗示されている。奴隷の所有は合衆国憲法で認められた神聖な財産権利であるとしたイリノイ州議会の決議に対する抗議文で、彼は「奴隷制は不正義と悪しき政策に基づくものである」という立場を明確にした。奴隷制はアメリカの汚点であり、いかなる意味においても正当化されてはならないという彼の主張は、「建国の父祖たち」の思想に基礎付けられたアメリカのビジョンに根ざしたものであった。このビジョンこそ彼をして当時のアメリカ世論と一線を画すことを可能にしたのである。しかし彼は決して奴隷制即時徹廃論者ではなかった。憲法が南部の奴隷制を認めている限り連邦政府はそれに干渉することは許されないという既存の奴隷制維持論を、注意深くそこに付け加えているのである<sup>3)</sup>。

要するに、この頃のリンカンが抱いていたアメリカのビジョンとは奴隷制をあくまでも悪とする主張の道徳的、倫理的基盤であったが、同時に、現状維持に固執することが今のアメリカが取るべき唯一の道であるとする政治的保守主義の拠り所でもあったのである。このリンカンにおける道徳的、倫理的潔癖さと現状維持的穏健主義という一見奇妙な混合は、多分に当時のアメリカのインテリ層の間に強い影響のあった啓蒙思想によるものであった。それは1838年1月にスプリングフィールドの青年たちを対象

に行なわれた文化講演に明らかである。

当時ナット・ターナーを首領にした奴隷の反乱や北の急進的奴隷制即時撤廃論者による「奴隷制反対協会」の設立は、北と南の両方の白人の間にパニックを引き起こしていた。ジョージア州では市民団体が急進派のリーダー、ウィリアム・ロイド・ギャリソンの首に5,000ドルの大金をかけて暗殺者を募ったり、イリノイ州のアルトンでは解放運動を強く支持していた新聞の編集長エライジャ・ラヴジョイが奴隷制支持者によって殺害されるというショッキングな事件に発展していた。1838年の「我々の政治体制の不滅性について」<sup>4)</sup>と題したリンカンの文化講演は、このような緊迫した政治情勢を意識して行なわれたものである。彼はアメリカ合衆国の政治機構は少なくとも過去のいかなる政治制度よりも市民の人間としての自由を擁護するに適切なものであるとした上で、このアメリカ民主主義の精神は今や暴徒の精神によって内側から切り崩されようとしていると警告する。南の奴隷所有者だけでなく北の紳士も暴徒と化し得るのだ。現在の倫理的、政治的大混乱を秩序と正義に変革する原動力は何か。独立戦争前後の正義への情熱か。否である。なぜならば、パッションは余りにも簡単に熱狂に変わり得るからだ。独立戦争時代のあの燃えるような情熱は今やかえって危険なものとなった。取るべき道はただ一つ、それは「理性—冷徹で、現実を見つめる、激情のうねりに左右されることのない理性」の発展、拡大をおいて他にない。「老いも若きも、富める者も貧しい者も、この理性という祭壇に犠牲を払い、その前にひざまづこう」とリンカンは聴衆に向かって呼びかけたのである。

このリンカンの文化講演の特徴を一つ挙げるとすれば、それは法と秩序を盾にした自由の規制や抑圧にも冷徹な理性は用いられるというリアリスティックな視点の欠如であると言えよう。人間の理性が持つ合理性のみを一方向的に強調することによって、リンカンは理性の拡大イコール正義の拡大という単純な方程式を編み出してしまった。この方程式こそ、理性を回復しさえすれば、アメリカは案外容易にその在るべき姿に自己変革することができるという当時のリンカンの政治思想の前提であった。故に、現実

と理想の間の深い溝を凝視しつつ、現実を理想に少しでも近づけて行こうとする独立宣言のビジョンは後方に退き、その代わりに、とにかく目の前の困難を無事に回避すれば、アメリカの未来は自ずと開けて来るとする楽観的必然論が正面に押し出されることになる。ここにおいて我々は、アメリカは病んでいるが、その病は近い将来必ず、それも国民にそれ程の犠牲を強要することなく癒すことができるという、国家としてのアメリカが持つ潜在的可能性への強い自信をかいま見ることができるのである。このようなリンカンの楽観的アメリカ理解を如実に物語るものが彼の奴隷有償解放案と植民地案の二つである。

1852年6月、リンカンはケンタッキー出身の大物政治家ヘンリー・クレイの死を悼んだ長文の弔辞の中でこれらについて言及した。アメリカの素晴らしさはすべての人が自分の力で己が人生を主体的に築き上げていくところにある。したがって人格の平等性を否定する奴隷制はアメリカの汚点であるというクレイの主張は重要である。いつの日にか奴隷制は廃止されねばならない。この立場を抽象的な論理としてではなく、具体的な政策として展開したところにクレイの政治家としての偉大さがある。奴隷を政府の金で奴隷主から買い上げ、アフリカと中南米に植民地を開拓してそこに住まわせることをアメリカ合衆国の緊急な課題として提示したところにクレイの政治家としての貢献があるとリンカンは言うのである<sup>5)</sup>。

確かに当時の政治状況においては、クレイの提唱した有償解放案と植民地案は政治家として取ることのできるギリギリの線であった。奴隷制撤廃を口にすることさえはばかれたイリノイ州の国民的感情を鑑みる時、この二つの案を公にすること自体政治家として勇気のいることであったことは疑いない。しかし、それと同じく確かなことは、このクレイ案を支持した40才代前半のリンカンにおいては、アメリカ合衆国はあくまでも白人のための国家であるという認識が強かったという事実である。黒人が白人と同じ人間としての生得的権利を賦与されているという真理は否定されてはならない。しかし、その権利を十分生かすことをアメリカ合衆国は許さない。黒人の国家を形成することによってのみ彼らは自由な人間

として生きることができる、リンカンはそう考えたに違いない。要するに、当時のリンカンにはアメリカは白人にとってのみ「自由と平等の国」であり、黒人にとっては抑圧と差別の国でしかあり得ないという突き放したシニシズムが存在した。アメリカの理想の現実化は白人側のラディカルな意識の変革によってではなく、黒人を合衆国から追放することによって可能とされるという白人優越主義が、何のためらいもなく「建国の父祖たち」の思想と平行して主張された所以である。

## II. 1854年より大統領就任まで

リンカンの奴隷制反対の態度に一段と緊迫感が加わったのは1854年に「カンサス・ネブラスカ法案」が民主党の上院議員スティーヴン・ダグラスによって連邦議会に提唱されてからである。アメリカ合衆国全土への奴隷制の拡大を必至なものとするこの法案は、奴隷制の自然消滅がアメリカの理想の現実化に不可欠な条件と考えていたリンカンにとって大地を揺り動かすような衝撃であった。親友のジョシュア・スピードに宛てた私信<sup>6)</sup>にそれは明らかである。彼はその奴隷制反対の立場が決して抽象的な論理の上に構築されたものではないと主張する。私の心には14年前にルイヴィルからセントルイスに旅した時に乗った蒸気船で目撃した一団の鎖に繋がれた奴隷たちの姿が今でも焼きついて離れない。奴隷制そのものを道徳的立場から正当化しようとする人々に断固否を言わざるを得ない理由だと言うのである。

興味深いのはこの私信が奴隷制の他に一般の移民に対する差別を助長する政治的土壌にも言及している点である。彼は反カトリックと排外主義を旗印に掲げたノー・ナッシング党を厳しく批判して次の様に言う。彼らが天下を取った日には、「黒人以外の人間は皆平等である」という今の大方の意見は、「黒人と外国人とカトリック教徒以外はすべて平等である」という意見にすり替えられてしまうに違いない。そのようなアメリカより完全な専制政治を敷いているロシア帝国の方が欺瞞が少ないだけまだましだと思わないかとリンカンはスピードに語りかけた。ここにも我々はアメ

リカの在るべき姿はあくまでもすべての人に開かれた自由と平等の国であるというリンカンの強い確信を感じ取るのである。数年前の彼の白人優越主義はこの時点で大幅に限定されたものとなったと言って過言ではない。

彼が1854年と1858年の2回にわたって連邦上院議員指名選挙に打って出た裏には、既存の奴隷制の拡大を阻止するために今彼に出来る最も効果的な活動に身を捧げねばならないという強い使命感が確かに存在した。我々はその決意のほどを1854年10月の「ピオリヤ演説」<sup>7)</sup>に読み取ることができる。アメリカ合衆国は、独立宣言の精神をその基盤に置く限り「永久に救うにふさわしいもの」であり、「世界中の幾百万の自由で幸福な人々によって後々に至るまで祝福されるに違いないもの」であるとリンカンは言う。この理想の追求に不可欠な条件とは何か。何人にも制約されずに己が人生を形成して行く自己統治の権利がそこに住むすべての国民に与えられること、これなのだ。この権利に関する限り白人も黒人も何等変わるところはないという確信を、リンカンはそれまでのいかなる演説や文書にも勝って力強く正面に押し出したのである。奴隷制は黒人を家畜やものとみなすが故に「この世において最も醜悪な悪」であり、アメリカが「正義の点で世界の範たる国家となることを妨害する」最大の障害である、という結論が引き出された所以である。

ここで注目すべきは、リンカンが生命、自由、幸福の追求という人間に不可分な権利を互いに共有するためには鋭敏で繊細な倫理的、道徳的感性が必要であり、そのような感性こそ真のアメリカ人であるための欠くことのできない素養であると理解していたという点である。故に彼は奴隷制を拡大するかどうかは、畑にたばこを植えるか植えないか、農場に牛を飼うか飼わないかという日常茶飯事の問題と同次元でしか捉らえようとしないうスティーン・ダグラスの倫理的無関心と道徳的不感症に強い嫌悪を表したのである。「このような無関心こそ奴隷制を拡大しようとする願いを隠蔽するものに他なりません。私はそのような態度を憎まざるを得ないのであります。」

しかしこの「ピオリヤ演説」にも啓蒙思想の影響は強く陰を落としてい

る。即ち、白人の大部分は奴隷制の悪を認めるにやぶさかではなく、彼らはその自然消滅を促進しこそすれ、阻害することはないとするアメリカ国民一般が持つ倫理性、道徳性に対する楽観的見方がそれである。「ピオリヤ演説」と同じ主張が4年後のイリノイ州共和党大会の「連邦上院議員候補指名受託演説」<sup>8)</sup>で繰り返されている事実からも、啓蒙思想に基礎付けられたアメリカのビジョンがいかにリンカンの政治思想を一貫して貫いていたか、そしてそれが奴隷制との戦いを通してより明確に彼自身の中で意識されるようになったかが如実に伺えるのである。

リンカンの奴隷制封じ込め政策は、奴隷制即時撤廃をスローガンに活発な活動を繰り広げていた急進派とは一線を画するものではあったが、奴隷制はアメリカのビジョンと原理的に矛盾するという主張において両者は立場を同じくしていた。1858年の秋に7回にわたって行なわれた公開討論において、ダグラスはこの点を利用してリンカンを人種混合主義者として徹底的に糾弾し、反リンカン勢力の拡張を図ったのである。アメリカ合衆国は「白人の手によって、白人とその子孫のために建てられたものであり、したがって市民権は白人のみ、つまり、ヨーロッパ人とその子孫たちにのみ賦与されるべきもので、断じてニグロやインディアンやその他の劣等人種に与えられてはならない」<sup>9)</sup>と絶叫するダグラスに万雷の拍手を送った群衆にとって、リンカンは彼らの生活環境そのものを脅かす危険きわまりない人物と映ったのであった。

リンカンの主張に垣間見られる白人優越主義が当時の彼の気持を卒直に吐露したものであったかどうかは分からない。ただ確かなことは当時イリノイ州で人種混合主義者のレッテルを貼られることは、政治家としての生命を完全に断たれることを意味したということである。そのような状況の中で奴隷制封じ込め政策への支持を勝ち得るには、その立場が決して一般市民の生活のスタイルや環境にドラスティックな変化を要求するものではないことを明示しなければならない。そう考えたリンカンは、ダグラスの人種混合の非難がいかに根拠のないものであるかの証明に全力を注いだのである。私はなにもすべての点で両者が平等であるなどと言っているのではないと



リンカンがダグラスに反論した。確かに白人と黒人の相違は皮膚の色にとどまらない。私自身道徳的にも知能的にも白人が勝っている事実を認めるにやぶさかでない。だから黒人の女性を奴隷に持ちたくないという立場がどうして黒人の女性を妻にするということに直結するのか私には分からない。私が欲するのは、白人と同様黒人にも「誰の施しも受けずに自分でパンを得、食べるという権利」が与えられることであり、決してそれ以上でもそれ以下でもないリンカンは主張したのである。

このリンカンの立場は、少なくとも表面的には1852年のヘンリー・クレイの死を悼んだ弔辞で公にしたものと何ら変わるところはない。しかし、その動機には大きな変化があったとみるべきであろう。1854年以降、特に1858年においてリンカンには奴隷制拡大阻止のために是が非でも連邦上院議員になってやろうという意気込みが燃えたぎっていた。政治家としての彼は弁護士としての彼にも増して多くの人々の支持を得ることのできる現実的な政策を提案する必要に迫られていたのである。我々はここに物事を理性的、客観的に見ようとする法律の専門家から、何が何でもアメリカの理想を守らねばという情熱と使命感を持ったステーツマンへと変革した一人の人間の魂の歩みを見るのである。

1854年以来リンカンの中で炭火の様に燃え続けていた奴隷制拡大阻止への情熱は、彼をして当時のアメリカの知識層より遥かに革新的な考えの持ち主にさせていた。彼の対ダグラス連邦上院議員選挙戦の2回にわたる敗北はこの事実を如実に物語るものである。このリンカンの政治的革新性の基盤を提供したのもこそ彼自身のアメリカ理解であった。アメリカ合衆国全土に奴隷制が拡大する可能性に目をつぶるには、彼が描いたアメリカのビジョンは余りにも雄大であったと言わなくてはならない。アメリカが掲げる自由と平等の理想は人類の歴史の規範となるものであり、それをないがしろにすることはアメリカ国民のみならず、人類全体にとって大きな損失であると彼は考えたのである。

### Ⅲ. 大統領としてのリンカン

南北分裂という一触即発の危機をはらむ緊迫した状況の中で大統領に就任したリンカンを支えたもの、それはアメリカ合衆国の雄大な理念に対する深いコミットメントであった。彼のアメリカに対するビジョンが南北戦争勃発後により確かなものにされて行ったことは、彼が1861年の独立記念日に議会に送った「戦争教書」<sup>10)</sup>に明らかである。先ず彼は、この戦いは国民によって民主的に選ばれた政府が果たして永続的に存在し得るかどうかという民主主義の根源を問う戦いだと断言する。民を治め、統治するに最も効果的な政治機構は君主制に限るとする大方のヨーロッパ人の考えに抗して打ち立てられた政治システムこそアメリカの民主主義なのだ。アメリカの新しい国家的実験は奴隷制の存続を主張する南部連合によって未曾有の危機にさらされている。今この民主主義の実験が失敗に終わるということにでもなれば、民主主義そのものが永久にこの地上から消え失せてしまうだろう。人類の希望の灯は吹き消されてならないとリンカンは言うのである。彼はそのアメリカ理解を以下の言葉に託して人々に語ってみせた。

この戦いは本質的には人民の戦いである。即ち、連邦の側にとっては、人間の状態の向上を主要目的とする政府の形と実とを、この世界において維持しようとするための闘争なのである。言い換えれば、万人の肩よりすべての人口的な重荷を取り除き、立派な職業の道を切り開き、万人に対し人生の初めにおける差別のない出発点と公平な機会と与えることなのである。

(中 略)

このように我々の道を選んだ以上、嘘偽りなく、純な意図をもって、神への信頼を新たにし、恐れることなく雄々しく前進しようではないか。

リンカンによれば、アメリカ合衆国は民主主義国家の先駆けとして人類の歴史においてユニークな責任を課せられている。その意味でアメリカは

世界中の抑圧された人々の前にさんぜんと輝く希望の灯なのだ。このアメリカ合衆国に与えられた責任と課題を顧みたま時、南部連合の行動が決して彼らが言うような自由と正義のための革命ではなく、大義に抗して自らの利益のみを追求する反乱に過ぎないことは明確だと彼は言う。「革命の権利は法律上の権利ではない。あくまでも道徳的権利であり、道徳的に正当化することのできる目的のためにのみ行使され得るものである。」したがって、すべての人に生命と自由と幸福の追求の権利を、と主張する立場に反旗をひるがえす人々が革命を口にするには許されない。南部連合は反乱の徒であり、革命家の群れではない。独立戦争の精神は彼らの側にあるのではなく、連邦側にあることを忘れてはならない。そう言ってリンカンは大統領教書を閉じたのである。

ちなみに、この教書が議会に送られる数か月前、彼はニュージャージー州議会で演説をし、アメリカ合衆国は「未来の世界のすべての人々に与えられた偉大な約束」であるとし、大統領としての自分は「神の摂理の貧しい器」であるという解釈を提示している<sup>11)</sup>。このことから、「この国家が、神のもとで新たに自由の誕生をなし、人民の、人民による、人民のための政治をこの地上から消えることなからしめんこと」こそ残された人人に与えられた課題であるという「ゲティスバーグ演説」<sup>12)</sup>（1863年11月）で明示された信念は、大統領就任当時既に彼の中で確固としたものになっていたと考えて間違いない。

このリンカンのアメリカに対して抱いた雄大なビジョンこそ、彼をして奴隷制拡大阻止に関するあらゆる妥協を排除させ、南部連合と徹底的に対立せしめた原動力であった。その意味で、南北戦争は彼が大統領に当選した時点で既に不可避なものになっていたのである。ここにおいて我々は、リンカンにとって連邦の維持そのものが第一目的であったと主張するビンセント・ハーディングに対して次の立場を提示することができる。即ち、大統領としてのリンカンにとって究極的な関心事は、人類の歴史における民主主義国家の先駆けという理念を、南北戦争という困難きわまりない現実との取り組みの中にどう生かすかという政治的、倫理的、神学的課題の

解決であったとする立場である。

既に見たように、大統領就任以前のリンカンにとってアメリカ建国の理念の再生は、国民に対してラディカルな自己変革を強いるものではなかった。封じ込め政策によって奴隷制は自然消滅の道をたどるに違いない。人間の理性はその過程における様々な困難を解決するに十分である、とする楽観論を彼が開戦間際まで捨てようとしなかった理由がここにある。しかし、南北戦争の勃発はこの彼のアメリカに対する安易な考えを粉々に打ち砕いてしまった。それに加えて、開戦直後の敗戦に続く敗戦は、彼をして国を同じくする者同士の殺し合いの最高責任者という立場を凝視させ、今さらのように慄然とさせたのではなかったか。特に「第一ブルランの戦い」における連邦軍の無様な敗走は、それが「戦争ごっこ」を見物にやって来た北の紳士淑女の目の前で起こったこともあって、リンカンの個人的評判の凋落に拍車をかけたばかりでなく、連邦軍全体の士気に甚大な影響を及ぼすこととなったのである。

このような困難な状況の中でリンカンが最も心を砕いたもの—それはアメリカ合衆国の建国の理念をいかにして国家分裂の阻止という偉大な事業に反映させるかというこの一事であった。大統領就任以後における彼の奴隷制との取り組みはこの文脈の中で理解されねばならない。南北戦争勃発直後から、奴隷解放を反乱阻止の第一目的とすべきであると大統領に迫った理想肌の政治家や指導者が決していないわけではなかった。しかし、彼らの要請をそのまま認めるにはリンカンが直面していた政治状況は余りにも複雑であった。まず、彼には既存の奴隷制を認めた連邦の維持をその政策として打ち出したからこそ選ばれた大統領であるという認識があった。大統領といえども合衆国憲法で合法化されている制度を直ちに撤廃する権利はないというのが当時のリンカンの考えであった。もう一つは周縁州の問題であった。周縁州とは奴隷制を敷いていたが、連邦の分裂はあくまでも避けるべきであるという立場を取ったが故にかろうじて連邦側に留まっていた州を指す。奴隷解放を宣言して彼らをいたずらに刺激し、南部連合側に追いやることは連邦にとって百害あって一利なしと考えたリンカンが、

奴隷解放を正面に押し出すことにちゅうちょしたのはむしろ当然であった。大統領としてのリンカンの立場を複雑にした要因の第三は、北の人々の間に黒人のために戦うのはごめんだという厭戦ムードが蔓延していたという事実である。脱走兵の出現や大都市での暴動によってこれ以上連邦軍の士気を低下させることは大統領としては何が何でも避けねばならないことであった<sup>11)</sup>。

リンカンは連邦維持にきゅうきゅうとした大統領であり、それ以上でもそれ以下でもなかったと結論するビンセント・ハーディングに欠落しているものは、以上概観した政治的制約に縛られながらリンカンがいかにかアメリカの理念に忠実であろうと努めたかという問の解明である。とにかく、アメリカ合衆国存亡の危機に直面してリンカンは、アメリカという国がその崇高な理念にもかかわらず、いかに人種差別によって根底から侵されているかを肝に銘じて知らされたのであった<sup>12)</sup>。この理想と現実の間で大統領として悪戦苦闘したリンカンにおいて注目すべき点が二つある。即ち、老獺とも思える円熟した政治家の誕生と、聖書的信仰へのより深いコミットメントがそれである。この新しい二つの要素は彼のアメリカ理解に深い影響を及ぼすことになるのである。

円熟した政治家としてのリンカンを証するものとして、1862年8月に「ニューヨーク・トリビューン」紙の編集長ホレス・グリーリーに宛てた公開書簡がある。

…この闘争に際し、私の最終的目的は連邦を救うことであって、奴隷制度を救うことでもなければ、これを破壊することでもありません。……私が奴隷制を何とかしたい、黒人の人々のために何とかしたいと思うのは、それが連邦を救う道だと信じるが故であります。<sup>13)</sup>

ハーディングを初めとする多くのリンカン研究家のように、この言葉からリンカンの奴隷解放への努力を軍事的に必要な措置でしかなかったと結論することは避けねばならない。既に指摘したことであるが、リンカンは奴隷解放はそれが連邦の維持という大義名分によってのみ国民の支持を得

ることができるであろうことを確信していた。奴隷解放へ国民の支持を集結するためには、現在大統領として不人気の極みにある彼自身の個人的信念と無関係であることを彼らに納得させねばならない。それは、連邦維持という誰も反対しようのない国家的目的を完遂する過程に生じる付随的な性格のものであると主張することによってのみ可能となる。そう考えたリンカン<sup>14)</sup>は、大新聞への投書という手段を通して、やがて布告されるであろう奴隷解放宣言に向かって国民を精神的に準備させようと図ったのである。ちなみに、彼はその丁度1か月後に「奴隷解放予備宣言」を布告している。我々はここにアメリカの雄大な理念を実現させずにはおくものかというリンカンの強い意気込みを感じ取ると同時に、その実現のためには老獪な手段も厭わない百戦練磨の政治家に成長した彼の新しい側面をかいま見るのである。

大統領としてのリンカンを特徴づけるもう一つの要素は、聖書が啓示する神への信頼の深化である。これに関する様々なエピソードは閣僚や友人、新聞記者やホワイト・ハウスへの来訪者等の証言によって記録に残されている<sup>15)</sup>。彼の信仰が歴史における神の摂理を識別しようとする真摯な試みを通して追求されたものであることは、「摂理に関する覚書」<sup>16)</sup>として知られるメモやフレンド派の指導者エライザ・ガーニー夫人に宛てた2通の手紙<sup>17)</sup>に明らかである。しかし、リンカンの信仰の内容を最も簡潔かつ適切に表わした資料といえ、何と言っても暗殺される5週間前になされた「第二次大統領就任演説」<sup>18)</sup>(1865年3月4日)をおいて他にない。この演説は同時に、それまでの彼のアメリカ理解に見過ごすことのできない質的变化が起きていたことを示すものでもある。以下はその要旨である。

奴隷制をアメリカ全土に拡大し、恒久的なものとするのが反乱者たちの目的であったとするならば、それを極力阻止することが連邦側の目的であった。この戦いがこれほどまでに長期化し、大規模で凄惨なものになるとは誰も夢想だにしなかった。南も北も安易な勝利を願い、戦いの短期終結を望んで神に祈り求めたのだ。しかしそのような楽観的見方を神は完膚なきまでに叩きのめされた。我々はこの忌わしい戦いの中に隠された神

の御旨を識別しなければならない。この戦いの究極的な意味とは何か。それは奴隷制というアメリカが犯し続けて来た国家的罪に対して神が下したもうた裁きに他ならない。今こそ我々は神に対して悔い改めるべきなのだ。この戦いがアメリカ合衆国の再生の一步となり、人類の未来に希望の灯をともす歴史的出来事となるようにひたすら願い求めるべきなのだ。

何人に対しても悪意を抱かず、すべての人に慈愛をもって神が我々に示したもう正義を固く守り、今行ないつつある業を成し遂げるために精一杯の努力を払おうではありませんか。国民の傷を包み、戦闘に倒れた者、その未亡人、孤児をいたわるために努めようではありませんか。それによってわが国民の間にも、またすべての国民とも正しくかつ恒久的な平和がもたらされ、慈しまれるように共に祈ろうではありませんか。

アメリカに民主主義の実験という大きな歴史的課題が課されているという考えは、晩年のリンカンにおいてますます強固なものにされて行った。新しく芽生えたのは、アメリカはこの国家的責任をあたかも己が国家的徳がもたらした神からの正当な報酬であると誤解してしまったという神学的認識である。アメリカの在るべき姿は今のアメリカの延長線上にあるとする欺瞞と偽善は徹底的に裁かれねばならない。この主張こそ、大統領としてのリンカンが到達した新しいアメリカ理解の中核を占めるものである。啓蒙思想の安易なオプティミズムは聖書の間人観と歴史観によって克服されたと言い換えることもできよう。従って、神の裁きの厳しさは彼を決して絶望や諦めへと導くことはなかった。裁きは悔い改めを喚起し、悔い改めは和解と再生を可能にすると考えたからである。「わが国民の間」はもちろん、「すべての国民」の間に平和が訪れることが和解と再生の真の姿だとすれば、この恒久的平和の確立に貢献することがアメリカ合衆国に与えられた責任に違いないとリンカンは理解した。そのために「何人に対しても悪意を抱かず」、いたわり合い、祈らねばならないと。この結論こそ、「第二次大統領就任演説」におけるリンカンの口調をいつになく熟を帯び

たものにさせた原因ではなかったか。ともあれ、「すべての人は平等に造られているという自明の真理」を証するために神の摂理の下に生み出されたというリンカンのアメリカ理解は、国家崩壊の危機という厳しい試練の只中で裁かれ、深められ、強められ、そして新しくされて行ったのである。

## 結 び

我々は、アブラハム・リンカンを白人優越主義者と定義したビンセント・ハーディングのリンカン論に触発されて、リンカンがアメリカ合衆国の存在意義をどのように理解していたかという問題の解明に努めて来た。確かに、大統領就任以前のリンカンのアメリカ理解に白人優越主義が見え隠れすることは否定できない。黒人の自由への飽くなき情熱と意志なしに奴隷解放はあり得なかったことも忘れてはならない。この2点を的確に指摘したハーディングのリンカン論はリンカン研究への貴重な貢献である。にもかかわらずそのリンカン批判に問題があるとすれば、それはリンカンという一人の人間をその歴史的、政治的、精神的状況から切り離して論じる抽象論に求められる。リンカンを白人優越主義者という鑄型に押し込めることによって、ハーディングはリンカンのアメリカ合衆国理解に生じた微妙かつ重要な変化を見落してしまった。リンカンがアメリカ史に残した恒久的貢献である「神の摂理の貧しき器」というアメリカの存在意義は、ハーディングが用意したステレオタイプからはみ出たところに発見される。<sup>19)</sup>これがこの小論が到達した最終的結論である。

## 注

- (1) 鈴木有郷『アブラハム・リンカンの生涯と信仰』，教文館，1985。  
pp. 265 - 277.
- (2) Vincent Harding, *There Is a River : The Black Struggle for Freedom in America* (New York : Vintage Books, 1981),  
pp. 231 - 232, 234 - 240.
- (3) *The Collected Works of Abraham Lincoln* (New Jersey : Rut-



gers University Press), I, 75. 以下巻数とページ数のみ記す。

- (4) I, 108 – 115.
- (5) II, 121 – 132. ちなみにリンカンが黒人のための植民地案を南北戦争勃発約1年後の絶望的戦況の中で再び北の黒人指導者達に直接提示している。彼らの厳しい反応はリンカンをして植民地案がアメリカ建国のビジョンといかに矛盾したものであるかということに気づかせる契機となったと思われる。それ以後リンカンは植民地案を提案しようとはしなかった。鈴木, 前掲書 pp. 173-175.
- (6) I, 260.
- (7) II, 247 – 283.
- (8) II, 461 – 469.
- (9) III, 1 – 12.
- (10) IV, 421 – 441.
- (11) IV, 236.
- (12) VII, 23.
- (13) V, 388.
- (14) Stephen B. Oates, *Abraham Lincoln : The Man Behind the Myths* (New York : Harper and Row, 1984), pp. 106 – 107.
- (15) 鈴木, 前掲書, pp. 228 – 235.
- (16) V, 403 – 404.
- (17) V, 420, 488.
- (18) VIII, 332 – 333.
- (19) アメリカ合衆国の存在の意味は、一貫して垂直の次元（神との関係）と水平の次元（社会との関係）の両方を同時に生きた人々によって取り組まれ、明らかにされて来た。マサチューセッツ湾植民地の初代の指導者ジョン・ウインスロップから18世紀のジョナサン・エドワーズ、19世紀のホレス・ブッシュネル、20世紀初頭のワルター・ラウシャンブッシュ、1930年代から50年代にかけてのラインホルド・ニーバー、そして1960年代の公民権運動の指導者マーティン・ルーサー・キングに至るアメリカの思想史を鑑みた時、この結論に疑いを狭む余地はない。大統領としてのアブラハム・リンカンが到達したアメリカ理解は、これら二つの次元を一貫して維持したものであるという意味で、アメリカ合衆国の存在意味に関するきわめて創造的な神学的解釈であると言える。